

はしがき

ILC米国理事長であり、ILCグローバル・アライアンスの生みの親でもあるロバート・バトラー博士が、急性白血病のため、2010年7月4日に83歳で逝去された。

亡くなる3日前まで、普段どおり執務をこなしておられたバトラー博士は、その生涯をかけた思想であるProductive Agingを、まさに身をもって私たちに提示してくれた。

●

博士は老年学の父として高名であるが、専門の精神医学の分野では回想法の提唱者であり、アドボケートとして高齢者差別を意味するAgeismという言葉を創出した。

博士はその多面的な活動を通じて、高齢者に対する差別や不当な攻撃と戦い、一貫して個人の長寿化と人口高齢化は社会にとっての豊かな財産であることを訴え続けてきた。

その原動力が素晴らしい祖父母の存在にあったことは、ピューリッツァー賞を受賞した“Why Survive? Being Old in America”の前書きに触れている通りである。

●

バトラー博士は40代で既に老年学の象徴であり、世界的にもその権威と影響力は絶大なものであった。しかし、その立場に甘んずることなく、世界中をエネルギーに飛び回り、更なる大きな構想実現に向けた活動を展開していった。

60歳でその構想—世界各国をつなぐ高齢問題の研究・啓発機関の組織化—に着手し、まず日本とアメリカに中核となるべき International Longevity Center (ILC)を誕生させた。

それから20年、今や世界12カ国にILCが存在している。

人類の悲願であった長寿を達成した国も、まだその途上にある国も、それぞれの現状を鑑みながら、すべての世代にとって恩恵をもたらす豊かな高齢社会の実現に向けた活動を積み重ねている。

●

バトラー博士は「高齢者が健康で活発に生きることができる社会では、高齢化は恩恵であり、富を創出することにつながる」ことを証明し、その思想と哲学の伝道師であり続けた。

そして、世界を変えるためには、長期的な楽観主義を貫きながら、目の前の一つ一つの障害や困難に丁寧に向き合う根気強さと、それらを取り除くための知恵が必要であることを、その生涯を通じて私たちに伝えてくれた。

●

だれもが長生きできること、そして皆がそれを喜べる世界の到来を目指して、常に最前線での取り組みを続けたロバート・バトラー博士の道のりを検証しながら、私たちは博士の強い意思とその情熱を再度確認しておく必要がある。